■ＢＦ連盟戦記３　呑子編

――バトルファック！　それは男女が互いのプライドを懸けて性の技を繰り広げ合う競技である！
そして『ＢＦ連盟』はバトルファックを普及するため日夜ハッスルする組織である！
今日も連盟の普及活動として、新たな犠牲者が招かれた！

今回の犠牲者は妖鬼・酒呑童子の末裔である荒覇吐 呑子！
連盟は彼女が連盟でバトルファックをしやすいよう、呑子の担当である羽良嶋累を誘拐して強制ＢＦ＆監禁！
監禁している羽良嶋をファイトマネー扱いにすることで、バトルファックするキッカケを作ってあげたのだ！
羽良嶋を取り戻すため……呑子は連盟の用意したＢＦ会場へ向かう！

（この結界……もしかして淫魔かしら？　相変わらずエッチなことしてるのねぇ。
でも、まさかこんなことまでするなんて……アタシを敵に回したこと、たぁっぷり後悔させてあげないとぉ♥）

普段から解放的で性欲旺盛な性格の呑子。
普通に誘ってくれれば、淫闘くらい乗ってやることもできたのだが……
連盟は呑子の性格を知らないのか、それとも知っていて敢えてなのか、悪辣な手段に出ていた。
彼らを懲らしめるためにも、自分の性欲を満たしてもらおう……
嗜虐的な笑みを浮かべ、呑子はリングに上がる。

◆ＢＦ連盟のバトルファックルール
対戦形式……
『エンドレス』制限時間なし、精力が尽きるｏｒ失神でＫＯされる、もしくは降参で決着がつくまでの真剣勝負。
基本ルール……
　ＢＦ連盟のリング上、男女それぞれ一人ずつによる一対一の対戦。
　絶頂や精力が残っているかはリングや会場の快感センサーや審判の判断で判定される。ただし選手の状態によっては続行可能の確認や意思表示が必要。
　意思表示には言葉での自己申告の他、自ら行為し続ける、勃起を見せる、ファイティングポーズやピースサインを見せる、などでＯＫ。
　リング・会場は連盟が結界を施しており、近寄ると攻撃系の能力が制限・封印される。ただし試合で勝利することで解除可能。
敗北条件……
　精力が尽きる、ダウンから１０カウント、失神、降参、ルール違反など。
　他、審判が続行不能と判断した場合。
　ただし試合を盛り上げるため、挿入や膣内射精、ＫＯが間近、などのタイミングでの降参は無効と判定されることがある。
　また、ダウンしても追撃が行われた場合は基本的に１０カウントしない。
　一度絶頂しても精力があれば続行可能。
ボーナスタイム……
　決着直後、勝者は一分程度もしくは一度絶頂・射精する程度に敗者を犯す権利が与えられる。
禁止行為……
　凶器・ドーピングの使用。※ただし淫気など、性感攻撃のみが目的の魔力や淫具の使用に関しては有効とする。
　性交、快感を与える目的やそれに類するもの以外の攻撃的行動。
　避妊具等の使用については自由。

【お、ボクの相手もおっぱいおっきい人だ♪　お姉さん、よろしくねー♪】
「あら、やっぱり淫魔ちゃんなのねぇ。今日はよろしくねぇ～♪」

今の呑子は普段着のだぼだぼセーター姿。ラフな衣装で頭ほどもある大きな胸……
巨乳を超えた爆乳サイズの乳球が強調されており、谷間が遠慮なくジロジロ見られる。
挨拶代わりの視姦に晒される中、呑子の方も少年をじっくりと観察。

呑子の相手は案の定、淫魔……妖魔の中でも性戯に特化した種族だった。
ただし、見た目や雰囲気は恐ろしく若く、魔力めいた力もほとんど感じられない。
淫気などの催淫効果に特化しているのだろうが、果たしてこれで淫闘に必要な精力があるのだろうか。

【お姉さん、いかにも経験豊富って感じだなぁ……ハメるのが楽しみだよ！】
「ふふ、どうかしらねぇ♪」
（淫魔ちゃんと遊ぶのは久しぶりねぇ……でも、案外大したことなさそうで安心したわぁ♪）

傍目にはグラマラスな美人である呑子だが、その正体は鬼であり列記とした妖魔。
若くして経験豊富であり、人間はもちろん、少年とは別の淫魔と淫闘したこともあるのだが……
過去に交わった淫魔に比べると、少年は雄としての迫力に欠けていた。
この場に出る以上、最低限の実力と自信はあるのだろうが……
女としての魅力に天性のものを持ち、夜の経験も存分に積んだ呑子にとって、大した敵ではなさそうだ。

（愉しめるなら、それでもいいんだけど……ふふ、ばっちり見てるわねぇ♪）

折角の淫闘だ、どうせなら楽しみたいところ。
少年は今もじっと胸の谷間を眺めており、これなら容易に呑子のペースに引き込めるだろう。
早くも彼をどう苛めるか考え、呑子は責めのプランを構築する。

『では――試合開始っ！』
【いくよ、先手必勝！】
ぎゅむっ♥
「あはぁぁんっ♪」

開始と同時、淫魔が速攻を仕掛ける。
正面から鷲掴みにする胸揉み責め。一見して雑に見える行為だが、そこは淫魔、絶妙な加減と淫気により、
人間が同じようにやっても生み出せない快感を与えてくる。
性感帯への直接的な刺激はご無沙汰であり、呑子も心地よさを感じさせられる。
ただし、全く脅威ではない。人間とは比にならない、という程度の快楽など呑子にとっては慣れっこだ。
そんな責めを受け、呑子は大袈裟に仰け反って喘ぐ。
淫闘を“愉しむ”、そして少年を呑子のペースに“引き摺りこむ”……それらを両立させる反応に、
早くも少年と観客の眼が血走ってきた。

【いきなり喘ぐとか、やっぱりおっぱいが感じるんだね！　そりゃそうか、じゃないとこんな格好しないもんね！
ほらほらっ、胸責め上手いでしょ？　もっと感じまくってよ！】
「あっ♥　やん♥　い、いきなりはダメよぉ♥　最初はやさしくしないとぉ……はあぁんっ♥」
『いきなりの速攻！　淫魔の胸責めが呑子を喘がせる！
牽制と思われた責めだが、見た目以上にテクニックがあるのか、それとも胸の感度が高いのか？！』

触れただけで官能のままに啼き、爆乳が大きく跳ねる。
呑子のやられ方は、巨乳フェチの眼には堪らなく魅力的に映るだろう。
更に揉まれるが、これにもほぼ抵抗せずに喘ぎ続ける。
無論、これは全て演技。一切快感がないというわけではないが、
耐えようと思えばいくらでも耐えられる程度の責めだ。
それを敢えて大袈裟に感じて見せて、少年たちを勘違いさせる……その思惑にまんまと引き込まれた少年は、
有利なポジションを取ろうと早速組み付いてくる。
余程に隙があると見えたか、正面から押し倒すのではなく後ろに回り込んでくる。
背後から好き勝手に弄るつもりなのだろう。
一応、それなりの身のこなし、しかし呑子にとっては遅すぎる動きで、少年が後ろから抱きつき……

『隙だらけの呑子のバックを取った！　このまま淫魔の責めが続くか？！』
【へへ、じゃあもっとスゴいのを……】
「あぁんっソコもダメぇ～♪」

ずむんっ♥
【っっ？！】

そこで少年の身体が一瞬止まる。
背後から抱くようにして責めようとした少年。その股間を、呑子の尻が刺激したのだ。
セーターはめくれてパンツも食い込み、半分ほど露出度した爆尻。
それを突き出し、いきり立った少年の肉棒に尻コキで反撃した呑子。
反撃は見事に成功し、少年はチャンスがピンチに変わってしまったというわけだ。

『おっと、これは身を竦めた拍子、偶然尻コキになったか？　淫魔のペニスがカウンターを受けてしまう！』
「あん♪　ごめんねぇ、おちんちんに当たっちゃったぁ？　痛くなぁい？」
【ぜ、全然だよ！　今から、もっと気持ち良くしたげるから……あ、ちょっとっ！】

痛いどころか、相当に心地よいはずだ。呑子は爆乳が目立つが、尻の方もハリと肉感に富んだ一級品。
これを押し付ければ、大抵の男は感触と興奮のあまり射精間近にまで至ってしまう。
胸責めの時点で強く興奮していた少年にはなおさら効いたことだろう。
呑子が狙ってやったと気付かず、強がってまだ離れないが、そこを尻が追撃。
くいっくいっ♥　と腰を妖しくくねらせ、後ろを取られた状態から尻で器用にペニスを扱く。

「あ♪　それダメぇ♪　おっきなおちんちん♪　お尻に押し付けちゃダメなのぉぉ♪」
【な、なら離れ……あうぅっ！】
ぶるんっ♥　ずりゅぅんっ♥
「はぅんっ♪　お尻の割れ目にぃ♪　おっきいおちんちん入ってるぅぅっ♥」
『どんどんヒップが押し付けられる！　偶然ではなく狙っていたのか？！』

呑子得意の、雄本能をくすぐる甘えた声色。
それが淫魔少年に“責めが効いている”と勘違いさせ、対処を遅らせた。
更に悪戯心に任せ、さも自分が責められているかのような声を出しつつ、実際には尻でぐいぐいと押していく。
卑猥な音色と組み合わせれば威力は性豪相手にも充分であり、
警戒を怠った少年は快感ダメージで呻き声を上げる。
バックを取り、圧倒的有利なはずの少年が身を竦ませる。
その隙を尻越しに感じると、呑子は反転して押し倒した。

「どうしたのぉ？　責めないなら……こっちからいくわよぉ～♪」
【あっ、ちょっと待って……うわあっ！】
『尻コキに淫魔が怯む！　その隙を突かれてタックルで倒された！　ペニスが露出される――！』
「さぁて、淫魔ちゃんのおちんちんはぁ……あはっ♪　ここだけはしっかり淫魔なのねぇ♪」

淫魔のショーツに手をかけ、ズラして性器を露わにさせる。
未熟とはいえ流石は淫魔、ペニスは完全勃起でないにも関わらず、相当な大きさを誇っている。
匂いもカリの形も申し分なく、何より凝縮された淫気と迫力が牝の本能を煽り立てる。
ご無沙汰の巨根を前にして、思わず本能に任せてしゃぶりつきたくなるが、
そんなことをすれば未熟な淫魔少年はすぐに果ててしまう。それでは愉しめない。
呑子は敢えてゆっくりと、焦らすようにペニスを摘まんで離すと、
セーターをめくり上げて自分の胸も露出させた。
ばるんっ♥　と音がする勢いで爆乳が揺れ、少年の眼が釘付けになる。

「じゃあ、今度はアタシがいぢめる番だけど……その前に♪　ほぉら、大好きなおっぱいよぉ～♪」
【お、おっぱい……！】
「んふふ、ずぅっと見てたの気付いてるんだからぁ♪」

吐息を吹きかけ、ひくんと震える亀頭。更に、次は左右の胸で挟んであげるとばかりに胸を開き……

「このおっぱいでぇ……淫魔ちゃんのおちんちん♪　すぅっごく気持ち良くしてあげるわねぇ～～♪」

【あ……ま、待って、そんなのされたら……】
「待たな～い♪」
ずにゅぅんっ♥
【はうぅぅっ！】
『倒れた淫魔にパイズリホールド！　これはがっつり極まった！　萎えるまで抜け出せないぞ――！』

一気に押し潰すようにプレス。
爆乳の形が変わるほど強く叩き付け、その衝撃で淫魔巨根がまた気持ち良さそうに痙攣。
だがパイズリはここからが本番。弾力と柔らかさを併せ持つ理想の爆乳が、
しっとりと吸い付くようななめらかさで密着。
その感触が根元からカリにまで至るのだ。
過去に味わった絶倫ですら数分と保たなかった威力に、少年は目を閉じて喘ぎ続ける。

【す、スゴっ！　おっぱいに、潰されるぅっ！】
ずりゅ♥　むちゅんっ♥　にぢゅぅぅっ♥
「あんっ♥　淫魔ちゃんも感じてるのぉ？♥　アタシもよぉ♥
流石は淫魔おちんちん♥　おっぱいに挿れてるだけでイッちゃいそうよぉ♥」

大袈裟に見える雄の喘ぎを見て、呑子も愉しくなって言葉で煽る。
少年に抜け出すことを考えさせないため、効いているような素振りも含みながらの官能ボイス。
これを聞けば雄は退くに退けず、効いているなら……と一縷の望みに賭けて、
ずるずると乳悦に呑まれるしかない。
乳圧だけでなく聴覚からも追い詰め、また一つ巨根がビクリと震えだした。

【そ、それダメっ！　離して……あぐぅっ！】
「やぁんっ♥　そんなことされたらまたおっぱい揺れちゃう♥
アタシのおっぱいまんこっ気持ち良くなっちゃうじゃなぁいっ♥」

少年が引き剥がそうとするが、ＢＦルールで暴力が使えない今、パイズリのホールドは簡単には破れない。
呑子はわざとらしく反撃でダメージを受けた風に見せ、また激しく爆乳を揺らしていく。
……もっとも、久々の淫行で、しかもペニスから直接的に淫気を浴びているため、
呑子も少なからず興奮してきているが。

（淫魔だし、油断は禁物よねぇ……悪いけど、一気に決めちゃいましょ♥）

興奮をそのまま攻撃的な意識に変換させ、嗜虐欲を一層高める。
ぷっくりと柔らかい唇が開き、唾液を纏った舌肉が伸びた。

「おっぱいまんこ、気持ち良くしてくれたお礼にぃ♥　じゅる♥　お口でもいただいちゃうわよぉ～♥」
【ひっ！　待って！　そんなことしなくていいから！　おっぱい以外も気持ち良くしたげるから、それはっ！】
「じゃ、今度はお口でぇ……いっただっきまぁ～～すっ♥」
じゅぼぉぉっ♥
【んはぁぁぁぁっ！！】
『パイズリからのパイフェラコンボ炸裂――！　淫魔の腰が浮き上がった！　これは絶頂が近いか――？！』
「じゅぼ♥　じゅる♥　んふっ♥　いい味してる♥　久々の若いおちんちんっ♥　おいひ♥　じゅぶるるるぅっ♥」

爆乳からはみ出る亀頭部を咥え込み、胸と口で同時刺激するパイフェラ攻撃。
乳圧で苦しんでいるところに、吸淫まで足されて少年は堪らず身体を跳ねさせる。
呑子の妖艶さを全く裏切らない、むしろ想像以上の肉圧の暴力。
これを前にすれば、たとえ少年が一人前の淫魔であっても同じ反応を示しただろう。
経験と天性の素質が生み出す、圧倒的な威力。
それを喰らって裏筋が何度も脈打ち、巨根ごと挟まれている睾丸がキュンッと収縮する。
司会が言う前に感じ取った、今にも迫る絶頂感――淫魔の濃厚な精液を想像して嗜虐欲を煽られ、

呑子は舌の動きを加速させる。

「んじゅっ♥　イクのね♥　出ちゃうのねぇ♥　いいわよぉ♥
お姉さんのおっぱい喉まんこにぃ……どっぴゅどぴゅ出しちゃいなさぁぁい♥♥」
【ダメ！　止まっ、あ……！】
「じゅぶりゅりゅっ♥　れろっ♥　じゅるるるるぅっ♥♥」
【んはぁぁぁぁぁっ！】

舌肉の先でカリを一周し、我慢汁ごと吸い立てる。
更に先端に押し当て、舌を激しく振動させて唾液を撹拌。
単純な吸淫や舐めるのとは質の違う刺激を与え、とうとう肉棒が耐え切れずに脈打った。

「まらよ♥　ここから更に……んぶっ♥♥　んぶぶぶぶぶぅっ♥♥」
【っひゃぁっ！　舌がっ！　掻き回してるぅぅっ！】
『バキューム、いやミキサーフェラ責めか？！　恐ろしい舌テクに、淫魔が震え――』
ビュルッ♥♥　ドプ♥♥　ビュバァァァァッ♥♥
【あぁぁぁぁぁぁっ！！】
「んふぅぅぅぅっ♥♥」
『ここで絶頂――――っ！！　先に達したのは淫魔！
想像以上のフェラチオテクニックに、絶倫も耐えきれなかった！　これが酒呑童子の鬼責めなのか――？！』

一瞬限界以上に膨張した後、噴き出される白濁。
すぐに口いっぱいに溜まるそれを、呑子はフェラチオと同じく驚異的な吸引力で吸い尽くす。
余りの量と熱に呑子の方もまた一段と興奮させられる中……数秒後、ようやく淫魔ペニスが解放される。

「ぷはぁ♥♥　濃厚精子♥♥　んっ……おいひ～～っ♥♥　ごちそうさまぁ♥♥
もっと愉しみたかったけどぉ……おちんちん、イッちゃったわねぇ～♥♥」

味を堪能し、勝ち誇った台詞で追い打ち。
淫魔は大量射精で勃起が終わり、萎えたことでパイズリから脱せたが……
これだけ精力を使ったのだ。もう勃ち上がることはできないだろう。
久々の雄をより味わうため、もっと手加減した方がよかった、などとすら思う呑子。
だが次の瞬間、その顔から余裕の色が消え去った。

「こんなに早く終わっちゃって残念だけどぉ、これで約束通り……」
【っ、ちょっと待ってよ。まだ終わりじゃないよ！】
「またまたぁ♥　このおっぱいから抜け出るくらい萎えちゃったの見てるんだか……ら……ええっ？！」
『淫魔、かなりのダメージだが……経穴を刺激して精力を増強させている！
萎えたペニスが再び勃起！　再戦可能なようだ！』
【流石に一筋縄じゃいかないね……さ、二回戦いくよ！】

一度放精した後、萎えはしたものの、淫魔は間もなく精力を取り戻した。
連続で行為が可能になる精力、俗にいう“二回戦”……それを目の当たりにして、呑子は驚愕を隠せない。

「ウソぉ……前の淫魔ちゃんは、一回で終わったのに……！　あれだけ出して、まだヤれちゃうのぉ？」
【淫魔を舐めちゃダメだって。まだまだこれからだよ！】

二回戦そのものは、淫魔といった精力特化の雄なら可能な者が多い。
だが、パイフェラ責めにより少年は相当量の射精をしたはず。
あれだけ出しても射精前と変わらぬ屹立を見せた者は初めてであり、予想外の精力に驚くが……

「若いっていいわねぇ♥　だったらぁ♥　枯れるまで気持ち良くしてあげるわぁ～♥」